



兵庫県豊岡市

地域の未来と アントレプレナーシップ

The Future of Communities
& Entrepreneurship

教育業界でも注目されるアントレプレナーシップ（起業家精神）。この連載では、全国さまざまな地域の未来に向けて取り組むアントレプレナーの方々取材し、何かを変える一歩目の踏み出し方、高校教育にも通じるアントレプレナーの視点を探ります。

第3回：存続の危機に「みんなでつくる・みんなで繋ぐ」映画館



「私がやります」
パート従業員から支配人へ

豊岡劇場、通称「豊劇」は、兵庫県北部唯一の映画館です。もとは芝居小屋から始まり、昭和40年代に大小2ホール映画館になりました。人口減少やコロナ禍で何度か存続の危機に陥りながらも、地域の人たちに支えられて復活。現在は「みんなでつくる、みんなの豊劇」をコンセプトに、映画好きが集まる地域「コミュニティ」としても活動しています。

ただし、私が豊劇に関わり始めたのは「地域のために何かしたい」というような動機からではありませんでした。

豊岡市と隣接する京都府京丹後市に生まれ、中学2年生のとき、今の夫と初めての映画館デートで訪れたのが、ここ豊劇でした。ホラー映画の『エクソシスト』を観るつもりだったのに、上映情報が古かったのか既に終了しており、「ペイ・フォワード 可能の王国」を観た思い出があります。以降も客として何度か通いました。映画文化の発信地であると同時に、映画好きの人たちが集まるおしゃれな場所として、豊劇は私にとって、長らく憧れ

豊岡劇場 支配人
田中亜衣子さん

京都府京丹後市生まれ。京都市内の大学卒業後、京丹後市にUターン。3児の母として子育てと並行し、数々のパートを経験する。現在は、但馬地域で唯一の映画館、豊岡劇場（通称「豊劇」、豊岡市元町）の運営組織・一般財団法人「豊岡コミュニティシネマ」の代表理事として豊岡劇場の支配人を務める。



の場所でした。

時を経て夫と再会、結婚し、3児の母に。子育てと並行してパート業務をする日々。それでもいつか豊劇に関われたら、という思いが消えないなか、ネットで豊劇のパート従業員の求人を見つけて応募したのが2021年でした。ようやく憧れの場所に関わることができた。ところが、パートとして働き始めてから一年ほど経ったころ、突然、休館が発表されました。

地方における映画館の経営状況が厳しいことは、私でも想像が付きました。それでも悔しくて、当時の支配人に「何とかならないんですか」と聞きました。すると支配人からは「閉館ではなく休館としたのは、誰かが継いでくれる可能性を残したかったから」と返ってきたのです。

その瞬間「私がやります」と言っていました。心のどこかで、豊劇を未来に繋げていく役割を、自分も担いたいと思っていたのかも知れません。直感的に「私に順番が回ってきた！」と思いました。

もちろん周りからは「パート従業員に、地方の映画館の立て直しができるわけがない」「やめておきなさい」と猛反対されました。それでも自分の意思を曲げなかったのは、私が経営者としての仕事についてほとんど知らなかったからでしょう。無知だったからこそ、大胆に飛び込めた。そして休館翌月の2022年9月、豊岡劇場の新しい運営組織として一般社団法人「豊岡コミュニティシネマ」を設立し、3代目の支配人になりました。

当然、パートと支配人では、同じ映画館

の仕事とは思えないほど役割が違います。映画を問題なく上映すること、人を雇うこと、お金のやりくりをすること…。失敗もしながら、試行錯誤していききました。

高校生から「地域のハブに」

ここは映画を軸にしながらみんなで共有する、場なのだと思い教えてくれたのは、豊劇を愛している地域の方たちでした。休館から復活するまでの準備期間中に、地域の方たちと「豊劇の未来を考える会」を何度か開きました。そこで聞かされたのが「お客さんとして来館する以外に、この場に関わる術がないのが寂しい」といった声です。長らく豊岡劇場に憧れてきた私も、似た思いを抱えてきたので、その言葉には共感できました。

私の支配人としての最初の仕事は、この場所に「関わりしろ」を増やすこと。そう考えて豊劇の未来を一緒に考えて行動してくださるボランティアチームを立ち上げることに。初年度は20名を超える方々が集まってくださり、さまざまな形で豊劇に関わっていただきました。

「豊劇の未来を考える会」に参加した地元の高校生が「豊劇には、地域のハブのような存在になってほしい」と言ってくれたこともあり。映画を通じて、誰かと誰か、何かと何かをくっつける磁石のような存在でいてほしい、と。はて地域のハブとは体どういいうことかと考えながらも、豊劇という場が集ってくれるみなさんの声に背中を押されて、新しい取り組みがどんどん生まれていきました。



1 休館を経て、2023年3月に営業再開した豊岡劇場。本年2月には、豊岡2階の控室と隣の民家を活用して、映画館に泊まれるゲストハウス「TOYS(トイズ)」を開業し、豊劇の新たな楽しみ方が広がっている。

2 再開後は「豊劇でやりたいこと」を意見交換する場がたびたび開催されており、実現した企画も多数。豊岡劇場ロビーで販売するオリジナルグッズも、有志が自由に参加できる「とよぎきミーティング」で発案されたもの。

誰も仲間はずれにしない場所

休館からの復活、映画を真ん中にして地域のみなさんが集まることができるところづくり…。いずれも、私一人では決まることがなかったことばかりです。想定外のことにはぶち当たり「どうしよう」「大変だ」と私が大騒ぎするたびに、劇場スタッフやボランティアのみんなが助けてくれました。それはまるで、頼りない支配人と、頼もしい仲間たちとでもいうような構図で、感謝する反面、自分の未熟さが不甲斐なく、時にはすべて投げ出したくなることもありました。

しかし、恥をかき、迷惑をかけながらで

地方のミニシアターにまで来てくれる映画監督や俳優さんはなかなかおらず、舞台挨拶のようなイベントは頻繁には行うことができません。ならば地域の素敵な方たちに登壇してもらおうと始めたのが「豊劇シネマトーク」です。映画のテーマにちなんだ地域の方をお呼びして、お話を聞かせていただく。例えば介護や福祉にまつわる映画の上映にあわせて、福祉やケアの活動をしている方をお呼びするなど、この場だからこそできる出会いや集いを企画していきました。

昨年には、学校になかなか行けなかったり、放課後に行く場所に迷ったりしている10代の子どもたちに向けて、映画館を開放する「本と映画 テルル」の活動も始めました。みんなの「場」としての企画やアイデアはほかにもあり、これから実現させていきたいと考えています。

一人ではなく、みんなで。だからこそ私は、豊劇を、誰も仲間はずれにしない空間にしたいと心がけています。例えば、固定のメンバーがいつも集まっているかのように見える写真を、SNSに載せない。内輪感を出しすぎず、いつでも誰でも、フラッと入れるような場であるように…。なんて思ってしまうのは、私自身がこれまでの人生で幾度となく「自分自身には馴染めないかもしれない」と思い込み、疎外感や孤独感を覚えた経験があったからかもしれません。

映画館とは、そういう気持ちを癒やす場所でもあります。たまたま観た一本の映画で、その人の心が救われることがある。その人が救われることで、その家族や友達が幸せになる。その隣の人も…。一人ひとりの幸せが連鎖し、地域の幸せに繋がっていく。ひいては世界平和に…。とまでは言い過ぎでしょうか？(笑) でも、そんな『ペイ・フォワード』の始まりのような場所を大切に、次の世代に繋げていきたいです。



地域の未来につながる アントレプレナーの視点

視点

1

思い出の地であり憧れの場所だった映画館に関わる機会をうかがい続けて、パート従業員から支配人の道に。「好きな場所を未来に繋げたい」という強い思いが出发点で、それがおのずと地域の未来に繋がる取り組みになっている。

視点

2

ボランティアやイベント登壇など、映画館への「関わりしろ」を増やしたことによって、地域の人たちが参加しやすくなった。さらに内輪感や誰かを排除する雰囲気を出さないように心がけ、誰でも参加できる空間にしている。